



5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

508
6



公慈明剛

薛文清曰。治獄有四要。公慈以烟。公則不偏。慈別不私。以別能照。則別能辦。讀盡錦ノ四家父信幸此四字。戒小憲。山不足。又。又。利達在天。無可求。之煙。往業。字。術。五。人。有。可。求。之。道。の。煙。と。通。度。訓。あり。往。字。多。不。似。ノ。則。戒。平。度。す。か。年。暮。地。到。年。御。近。總。數。年。年。總。書。藏。文。志。年。帝。紀。官。術。年。年。と。一。橋。復。修。不。警。往。而。年。と。子。附。因。

嘗帝内外經と鈔りては多きの名なすす。院れりま
の序例お化せし。第之御神農而ま。主と飯を吃れ
蓋一萬人丈主不烹少も人を口に少く。其多きの革毒を
移一毛とも多とす事無。後世所為の革毒を
引ひて古毒寒温より多く是れ。此よりかくも
。彦支國流。國而市々政官良基公。後院御茶屋
貞和二年。同日貞治二年再任。永徳元年。入洛。貞

和二年。御改ト。改めて。之の御改。之年。御改
淳安丹波守某付ませし。とや。多々の也。足和の仰
公所。彦支。林門村。祠と立開。則以也。

山家記。是。彦支氏の記す。とや。云。嘉慶元
六月薨したよ。

。賦役と水。一役。て民。小施。か。不。仁。の政。う。三。ア。モ。ヒ
安の田。氏。そ。ハ。能。ミ。圓。民。と。う。ツ。ケ。自。ち。而。と。軋。で。政。と。逃
止。セ。共。高。通。小。舟。と。窮。ウ。わ。而。恭。後。ウ。テ。放。と。放。じ
取。リ。油。起。天。武。の。難。主。と。奉。て。主。と。放。ど。の。而。經。の。天
子。集。不。政。と。う。と。云。詔。ウ。王。奏。以。そ。と。放。一。て
主。と。除。絶。一。天。主。は。エ。ト。小。要。て。は。心。の。主。小。達。主。と。算。云
天地。其。始。と。之。れ。で。力。ひ。の。君。の。こ。ー。其。所。と。考。れ。ぞ

寛め極也ソイテ有リ不謂衆好之必察正事の要言宣
又虛す人や古人、一人ノ孫士刻と追名と美之也必言レを
達恭致と考スリ推責近々媚と肉少引の俗と外ス
逸して其仰交と厚い財の恩と至てももとしをひき
甚りもとをされぬ人のモトクシ一見恩あらず官家
もくを必謫逐邪恐ソラジタリ多所人の口ひき
惣とも漏洩を畫一て漏洩か志一推と密報説と因モ
とみて掌もありつゝ奸職小あも一て何モ

○朱子曰師保之任有二讀通經邦之學參知政事に之有
熟德言望考首降以堪，有倫教予之急故也後世或以

諸王或以武臣為之既然是天子之子与武臣豈可任
師保之責耶訛謬秉龍衣不復望云上諸類四

唐呼之官ハ弓の事ナシヤ大仰方深の任シ而後後
世任官の多基ニナリ故ふ鳥ども同音アリシム
ハナアリナリ鳥のうかづ事と云フ也トドケ
冷涼清々しさ不モリと傳列也行モツツヒ冷氣
消くゝ寒氣冰柱の如キナキ仰御寒之達
子季夏秋一区は清風と清氣と清氣と清氣

もくゆふれかセ、溫而夏清と云可也

ノカナ
タ

流音門^{セシ}註^{シテ}羣魚^{ソトワキ}遊^{ガク}教^{カタチ}見^ルと^ス孔氏^{カクジ}の後^{ヨハ}直^{ヒラス}因^{セシ}と^セ也^ス
門^{ムケ}門^{ムケ}中^ノ小人^{アリ}あ^リて^ム声^{ヒノ}アリ^ムと^シり^ムと^シひ
魚^{ソトワキ}遊^{ガク}教^{カタチ}見^ルと^ス孔氏^{カクジ}の後^{ヨハ}直^{ヒラス}因^{セシ}と^セ也^ス
忽^{ヒテ}無^{ナシ}の^{ナシ}ま^{ナシ}す

。尙方 五口字
松の木とく年 滅法文覺 松とく之

發行之義を紀す勢力もとづくものに比して
雲雨翼 シツ
大兩 エキ ツバリ 大兩 エキ 露 エト ヒタツ
霞 クモ のあり アリ 雨滌 スルナ セキ 霽 スルナ セキ 由雨之

○次に説文曰次い輪鏡也謂飲茶烟燄之不る物也
次至之多移移次之也ヨシハ妙因修之すまの事とくのじりう
鍔則先肩承み軒如後以之を次之之言也鍔之言也際
若玉珥や梅どく小師ハナミツル鏡、妝解アラマサトあれモカイ
脩多之一饅、麪餅やとくも少食形のヒラタチアラモ
稱乃よハ乞余和麪餅のウラノウラ數のよハ莫のウラ

ううとう

。律院事とよりづくわす。乞うううみくと後とて
さもて戒ははははまくとるの。のうとくおほはゆ
うううひの律戒の書の中うちアドロク。おほ圓城
寺。我は庵山と山海。うううう。又は
丁亥十月禁止券物めいしょくとくじ。禁物。猪突いのしゆ。

今て不効とい宸廟しんびょうすか所とや。紀後門主准の
内宿方うちじゆがたああいとひうく。後院後院後院の後院で
城内油じゆひきりするをす化ふえも。乞御圓
券物けんぶつの御うううう。

。晋南老光浦無月苦。京作ううう。辛せううう。ううう
ううう、苦耐くたいふほのうう。ナフクリーゲ

孤星光彌ごせう雪風昧しゆふく千里隔懷せきくわい。一片雲

往事夢殘むめい輪林りんりん曉。西山酒源しよげん對炉薰

甲子後興宣上人化。ナフ。曾方外の文。二十五年。うう
ううう。ああ。前月晉。彼事にまづてゆうて

曉山難なれ認ゆう雲旋くわん鉢程ばくてい室飛ひ基上い龍

方外多通知スコヌ幾歲けいざい。風霜盡くわう思おも古林鐘

とよすの人の命。足川の山下水ふれず。よこ観かんり。あ
あうじうとう。ゆく。やむほ跡あと。人解わかく。解わかく。人解わかく。人解わかく。

万々人をも及ばずとおもへて御
はまくらひゆうひうへて
かみのまへしむるへとおもひ
てひきとひき

○十三年正月廿二日
吳中行書

德系世親氏

祐金叔奉親

卷之三

長勝

信吉アシキチ、左近の後輩人子スミノコトノコ、門下ムダクの弟子ムシキ。

親長 ちかねつ子十人内沙ノ男女内沙十
門又十人内沙列也久母子沙三

何嘗不以爲君情情子久

右太師の別室和

左六重和自筆の一紙と以て是木底鉢子作より
。十三年正月奉親王御内侍御馬信充主に至りて之を書し
曰臣也あれ所謂酒井一族久保津流林屋吉成胸元所教云野
核内助物也承や

又之列酒井村山出江酒井あは是蓋一ノ郷の事也
之を源氏酒井^{一派}也酒井姓也此也而之
○予々家事と彰書年一其夷事に一河の銘もして當易景
及報景才子夢後の家物とも思はずうう生景枯不
常^{サラ}而家運隆窮亦百期存^{カシマ}享通籍抱闇兩命而已作肇^{ササヘリ}

山岳之志、失鉄石之操、苟貧順厭、遂陷不義而黷
列祖英名^絶池、皇神血脉、観^{ツケ}着服去。

銘曰

南藤分萬、武林惟殷^{ササ}家傳系紀、
代記功勲、積善祖宗、垂祐仍雲、
顧名思義、致身奉君、堅守臣節、
一要忠勤、友^{ツク}夫敵、餘何云云。

丁亥季秋念立

天野信景

あとでくりかえしてある

○天端寺ノ大政所

秀吉

尾列愛智院門事所材也。蓋は充のもの。

傍にて照高と聲。今後多ひ院の行役を察。一官せを擧げて國の

れ入満事と云ふ。是中納言の昌也。

高臺寺ノ政所湖月院之秀吉。尾列春。丹那翁。行人也。又松原

助丸入道。近母ハ赤トセ年三事家利。少輔。方陰。母うそと云。

山陽。宿野又らも初の昌也。

尾この又赤ト孫彦也。都司。國林院二位法印とす。

又常光院ともセ

松原セ年三事。都次。其子トセ。又都之の子。都也。中間。秀秋。高松
少輔。高院宮内。少輔。利房。ちあ。之後。写管。之。と稱セト。之
々の子。近也。ハ利房。近後。の昌也。

瑞龍寺日秀院。秀吉。建始院。之。法印。日海。近外。智多。政
院。外。智多。政。人。

の妻前園白秀次。母。公。秀吉。方。都。御。之。秀。後。而

致祥院政所

秀次

或人問。松原。秀次。母。公。秀吉。方。都。御。之。秀。後。而

連枝。う。と。室。い。松。り。や。室。外。門。事。所。、秀。子。の。署。父。之。う。

始。秀。子。の。母。之。本。萬。秀。子。と。秀。次。の。母。と。生。と。後。院。之。公。明

義。阿。孫。う。書。と。以。て。秀。長。神。子。千。高。と。称。と。而。院。院。之。連

秀。去。肇。基。の。時。い。あ。剣。と。言。せ。れ。し。と。而。後。世。承。り。と

い。秀。子。の。父。と。も。う。秀。次。の。父。也。稱。而。承。之。而。政。之。

。或。人。問。松。院。之。宣。の。門。都。入。祥。院。の。以。前。の。中。萬。院。之。子。の。次。ハ

竹。勝。院。の。子。の。う。す。し。而。之。派。之。院。の。子。の。ち。だ。ば。す。之。派。之。院。も。示。タ

定水之年承承波也西都の事カの内すうざの才と

寂滅ノ時とソニハ地ニヨリ門ノれ夜再び現され故
室門ノシキニテ手拙すヨリテ、老子ニ玄之又至象
山之門とソレをあくまで玄門と云う事いわゆ
文子教氏の名自ヒ多一

南明院光宣室家玉太丈人祐光の兄弟子孫を列副元年有り遊ス時、尾列の士
副曰、より方國日本の嫁アマミヤにて、東主と和謡の
時、副曰、今、一たまり沙翁妹と歌列ヨウコウを今以降、
浮川氏は嫁して、うトアマミヤとおんと、沙翁妹と歌者石
の系色アマミヤと、副曰、書アマミヤともす。幸の傳アマミヤもせし也。

とも妻の代に縁アマミヤとゆき、おの印三アマミヤは非と謝して
やをもひきと送アマミヤて、自命後嗣アマミヤと云アマミヤと別列アマミヤにて
浮居アマミヤと稱アマミヤ、馬鹿村アマミヤ、浮居アマミヤと云アマミヤ也。

○中殿和歌ノ御會

後冷泉院天喜四年二月題、新成櫻花アマミヤ、御房

新古今集アマミヤ、蘿載アマミヤ、御會忠象筆信之詠アマミヤ

白河院應德元年二月題、花契アマミヤ、多春アマミヤ、御房

又承暦二年四月、御會見帝王編年代要記而傳抄寫
堀河院永長元年二月題、花契アマミヤ、十年、中納言、御房

又喜承二年二月御會

崇徳院天義元年十月 題松樹詠久

十納主原作頼

太平記外諸實錄不見於

順徳院建保六年八月題池月久達

光の掌寺圓白

梅晴御會部類記證作明

中御言爲定

後醍醐院元德二年二月題花契万壽ノ中御言爲定

又建武二年二月御會

後光嚴院貞和六年三月題光多春友

圓白良基

見唐代皇記長吉補任等、南朝正年二十一年也

。行慶の御澤稱一足位至澤泰の記と不一致とは後世の偽書にて立向御室御のよしとそくいづれ見形の

人よし尺よ

。瓦當に代に足利源氏記室可内弓弓氏よし事
のつヰ りき

。靈陽院御軍後醍醐義昭卿てふえ事セ日歩今
の後敏中もよシリキもよ骨子とせし清ひそと秀吉
らされと難波ゆか都心門を既志もらつてり波の他源
金うよの川と所後醍醐まよす除蟻源ゆく
序一一代くら引よほやうせん御してるをとまつ
ともとあまとぬ陽やうとよもりてきてあらねとけ
常をちのよほのちよほのけを出くゆれ

の事と之もアハ
此處は元勅の御事のれ
ともと之は世運改め
ハチ民いとキタ
トモ人をうへ
旨モ萬國の京ひ
アリの事とあつて
所事繁縝り
虎威いわ争ひ
さくされり
と承クはども
トテ天荒地老
トテ古今の情感概あま
シキ

浮雲改夜一朝夕
何待桑田揚海廣
夢裡問誰若利濟
遙津毫毛百年久
○度長九年四月二十九日之内の行狀句の中

登天偏小肩元賓
函谷四圍嶠後陽成院
欵不加愁星剛外

とまつてのう耶波多丸のれもとソノ又事向
時和民無事
御市富士彦リ歌春室
は菊東のち年とそアセたまよ御
経句にゆきの字り可レヒシムキナリ
えれよとづけサセモカクシムヘヨ
伊豆ノとえのひめ人のゆれうきやまく今

。先山は昨も風邪のこわさうで毎日ねむとけ
けく脱障のすと、とゆ下、失儀と蓋轡に於
いて、此は睡足月肅く夕影を一見せし
る。暮ゆゆ八泊をとて仙也さり下せの源
死をもれと見てシテ、アヌス蔬包よせてモヤ沖は源
見ゆるもえまた、アヌスヒトあざれりモヤ前夜園春
竟も高捨秀の次、歌夷曲のまよと、搞一伽絆と
歌一て云此をもれ

唄歌遺得泊過紙、煥起全身投海中。

志摩更無存没陽、た翁詠至感寒風

嗚呼聞雲出石の文可久、久一郎の氣
を以て枯葉とれひく沙うれめをうちて、子
布一辯の毫と落ももして和音の韻とほゞそ
ぞ北國圖を始め、寒光衣裏玉壺中
山雲歌極山河吹、山聞音此處葉風
。丁亥十一月廿二夜のばく、旅列満すの半傍、足立
伏木と呼ぶ所音と迅音、等一山急これ、あは敷の
磐石くしけんて御平里に歌ふゆきもとす
一歌、灰室は滿く、空を鳴のて、すと歌を

里へもすまうるゝれぢよ色くとて歸るゝと
多われとやや詠用の清列候砂と改して候
にやま半うりしとよりく暗よ毛ひはる御音子
鷺る白く疵と都へ一物とすかしをひきとつ
了うるて毛あよ入とてあまの候そとつともう
て歌を元化うらがうへ酒と清潔耳あらとえ
弓の弓じよ遊と弓よ乞れ至三事うるを
曳と弓うへと毛体印日毛列りを囁く
曳と箭すと弓うへ遊と弓よ勧め以てくわ
弓うへとす事のれりと毛毛の弓

のじく海川下も布引の夏景はうとすうけ
一木、柳叶も高く號とてうへるるは
ト多よ入ても多効用一木にぬれぬまよ
そと金利砂のうへ平ニ主ひ多の當事也 ひきとえ
ちりう印正はうれわくい歌をれに附士革
乃候原とキ定めとくもう一物づきそれ
有りも今は奉く足のうけ一物づきとく
えも日ひ所り一木あるもあく足のうも尾根
と庭も一つよ行て風ぬけと一木よ立かうて
湯天づけれとすとすとととととととととと

又歴士山游一ハ植武天皇を追屬す年庚辰の春
吉日より施之ひと烟管く立と夜半を先と並
一其夕露まじく厚のアシカのて山邊宿
ナリセ四更よそく行はる山駆けを続かう。
其と朝の事よ坐を仰しと見ゆ。後
治和天皇御代之年貢を以て石とノ瓦を壇にさと
と見ゆ。山中まとう行はる者や至る集落はな
事の山も強ひともうとつゝさて延度するの
こころをめで年生て九百八年をうけ。甚中古
えれども花鳥に山野と名づけの渓谷へたま
ぬけとへる。もとぞとあわいて、ハラ種温泉

又時々燒け山圍を白山と中世燒け山
天正二年八月今も而て焼け山と云う事のゆふ列
竹川人の有えをもと多流を出れとあま
山下北村石屋山の山中を出でて、山野と
山中それより山林へとへて移りて、山中には、
又ノノノニ山の烟を人舌とせよと仰いわく
もとくすと山の煙の、いわゆる山煙とあま
ても烟えりとて、山の煙の、山煙とあま
て山の煙の、山の煙の、山煙とあま

○慎子曰有虞之誅以懲當墨以革繩以當罰
以旅履當刑以艾入輯當宮布衣無頤當大辟此
有虞之誅也斬人肢體其肌膚謂之刑書衣冠
章服謂之戮上世用戮而民不犯也用刑

而民不從也漢書武帝謂唐虞畫家而民不
紀指跡而言也

上权憲基子也持氏之臣
持氏横死之後私稱人臣領以立旌註疏寄

梅憲實私称^ス謙倉管領^ヲ其子憲房其子憲政為
北條氏康^一拔落^ス而逃^越後^ニ讓^リ長尾謙信^ニ於管領^ヲ
全^シ稱上枚^ト嗚呼其官領^ヲ乞^ト元^ト竊^ム稱^ス謙信得^シ盜物^レ則
是^レ亦臧而已^ト嗚呼謙信^ニ棄^テ祖先之氏^{シカセラ}謂^{シカセラ}地^ヲ之稱^ヲ所
謂冒^{スカス}產者^ハ害^{スル}戒^ム如^之何

。もと地山の中元法三年有りと云ふ文字のトモ邦
書一丸押あはる大塔宮復良親王の御手書と云
。圓山毛長秀次六人左臣西二位久一年後長徳一姫左大臣源
政直信雄八内大臣西二位

。足利の氏姓賤たる所の於中納言也。康定三年追贈右政直
前田利家従三位於中納言也。薨後贈従一位。

政直中納言也。享平成元年長十一年七月八日於三輪萬葉第

傳倫論薨の月

高野折也。利家。享和十九年九月万薨

於中納言原景勝

利家。享和九年正月万薨。内不

享和九年正月万薨。内不

。元利

卷之三

參議後三佐源正則

寛永六年七月廿四日薨

贈一子忠興

西保二年十二月二十日薨

贈一子忠直

寛永九年九月十四日薨

贈後下源忠昌

西保二年八月四日薨

○藤原和泉守高虎姓中原朝臣至後後下源忠昌
夏たる而爲弟元服至後之後下源後

改號之後後下源守高虎忠久實在於物故の子也

高津氏と比故高宗と称され一寛永二年六月十八日
卒す後名清佛

○飯尾ハ之善時有之死あり是爲之子也
之の一族也即ち之の子也即之中源姓左源守

。

楊ハ高宗亮上野八源姓後御守和田源氏後室子
宇多多三亮此直前輩而高宗亮御守山中楊氏山御守
中也楊氏高源守姓也高宗亮御守山中源氏山御守
瀧川八源氏又此黑々高源守也高宗亮御守山中源氏
金木八穗種但高宗亮御守人此本二年五支實時八源氏
高源守源氏高宗亮御守山中源氏山御守

菅原源守源氏高宗亮御守山中源氏山御守

布施ハ之善氏舟田八年家

左近也或稱之此氏實源之流也此之始者高源八源氏

大谷吉源ハ之善氏也

。ほふぬあすちの御跡の時無事とてひ後除多改とえ
考のすとれうへと云ひておはらもみにて人をも
移せり。也水戸府令の御代の中にある

御まと徳の御書式

御詔書の御文書に角の御書式

忠

草長九
九月五日門名所刊

松年民吉

直任

草長一
九月五日門名所刊

松年民吉

忠

。おは式にて御代に入りて是よりそれと並んでおは先延行
あり法うとやれ嘉昭院軍につきて、大浦毛利徳美使
大浦軍にかへてはくはる方御のほと基まも見へキ海セ
又直任

別官と望ア時書式 任官後ノ後官望書式

元利忠

可種 右近

寛文二年

三月廿日ナリ到

申入 右京文

御内院

申入 無庸助

伊勢

凡法を又、後官時其ノ、上臺有後官事と申上奉書と以テ
時の侍奏故名侍奏達。叢聞上御職事事とひの口宣
室及直旨往記と申す。

○亦大體又後原政宗ハ侍臣彈み少湖高遠男重宗
ニ年九月五日卒ス。東光院。乃至之て又
う美雄の若ありぬにゆきも傷夷北道主之。めううう度代院院
陣所にて山都霧と申すと
山あひの音はすと海に覺て波がとまけむ松風の音
又山都霧
中にはばくらさうめ、波立て音の濁のちうれ山雷
撫集の御すありづれ此風也。鶴とすとそ
のますすりやう風もひゑふつまどゆよ和歌の浦人
ひうう統後院達葉、難半に入て津ち民とあり。わざととくとく
にあく和音浦波と下りるくゆう
政宗とまづれは猶達院の軍も作つたれ

とひのぬの滿づるあらの空海の道より人車ぢり

又金字の法華經一巻と瑞りきく徳誠に

くらもてぬひりとせよらの書ひはま書や。ほの見が
はまか謹ひそく一まこと

。後承彦卿

法華經一巻

。又延喜大年十月二十日

斬白蛇十種珠寶

ミ

蒲生多羅國のスルヘリ御山中海の活い落てニ上山の蝶蟻射
たるゝとさり古手の海うれどものゆと、波を萬をあ
はて時代と化し白蛇と斬と書き

。化神首の傳記大同抄引。又時代の邊のゆと書ふ

かみとちて書ひとも下向くあり御玉風を乞ふゆ
清てそのとすにむかすりううの丈に被写いとて
時代の裏うちのとろとるくゆ
今川貞世曰人あひにまに船タの起砂もとのに遣ひてすま
うけりと氣のひきあへとゆふもとへとゆふもとへ
境也人々のよする人の際たちあト引けてすまふもと
まに坐りゆるやありと戒られ。諸事よりの食方
骨を縫合して清潔を掲列かとぞいたとひ西多を能むと
きとくのめぐみてあらん化利と金うるまハ高くと高き
一物ひと端じもハ角力ものと一體なり。所の事と帝の名

と秦のものに渴てせきいとまののくはるのくはるとよもて
通じて死に済へるとあは

。程子曰寧生之安弱國之臣。各安其心而已。苟擇勢從則愚矣者
不容於世矣。是傳忠臣負女の様うかすしてありを感す。
かあると一池と混りあひ物

ね心霜後綠 梅意雪中紅

万古天劄閣

龍飛入鳳翀

立翁詩に云ふておひに將とも勇うく、武とくと立のうす
けたもとそくへひくと
挿ら御意すのうとて又異方へしのうれ

。新四年將領の才根能利教へ氣勵近えゆふ興國九月更復
回復危の軍利らずして兵とて我尾列知多郡相模作の休休の
司は勢は思能の復りよりて十日留止。因ちと養ては學は事と確て
玄節はまではある。十月後付と即往改之興國。以爲能利教の
是事はハ猶北敵するに至る刑教が物が追て隠匿を企て
兵を教へんとせよ云承細中ち政改前二章へて所爲の
文を之をと付取れどもと考せば興國元年九月の
廢伏至り。亦よ解む

。核會下すの封未定をよほに考へ大寔年よりてはよめに當今事

六節は、既に良和が後の人うりひ子孫をもむ行也。
子雲は良和の名をも起りて称とて清和と号す。子雲は
ありもとあるじと称して下す。うる
。既に秀承は秀云の字す。承は、すと號ひ也。
うるあれとぞ言ふ。而叶葉の名を毫せられ。法源あ
源數ふるをも。事もて。事もとあれとぞせしと。うるく神を
秀云既傳は源數。源一。既傳數は。源也。うるて御智體
初うりし。秀云は山。山。秀云うりし。も。うりて。而更申す
秀云を。不復滿。秀云。既うる。既傳。秀云。鄭元
の戒宣文。應。うるや又人。あ流。秀云。秀云。秀云。秀云。秀云。

喪すのく。家と絶。禍と面す。胎す。秀云。既傳。秀云。
既傳。秀云。既傳。秀云。既傳。秀云。既傳。秀云。既傳。秀云。
既傳。秀云。既傳。秀云。既傳。秀云。既傳。秀云。既傳。秀云。
既傳。秀云。既傳。秀云。既傳。秀云。既傳。秀云。既傳。秀云。
。平清盛と白河院の御子うる。うる。秀云。既傳。秀云。
秀云。既傳。秀云。既傳。秀云。既傳。秀云。既傳。秀云。既傳。秀云。
秀云。既傳。秀云。既傳。秀云。既傳。秀云。既傳。秀云。既傳。秀云。
も。うる。秀云。既傳。秀云。既傳。秀云。既傳。秀云。既傳。秀云。既傳。秀云。

○盲人土流

一方三流 志通流 戸鳴流 玄西流
城方二流 大山流 姬文流

○生佛坊

建久年中人
始註草家少

志通流 戸鳴流 玄西流
城方二流 大山流 姬文流

○如一建業

建業之名見永記
今書種痘擬僧官

○覺一建業

通一

靈一

景一

清一

城元

住治東八坂江謂此
流經八坂方ト

○城一建業

城存

後村上院兵 国前後官兵

○河内

楠河内守正行

丸山門尉正儀

和田和泉守正武

丸山門尉正儀

○大和

伊賀

伊賀

○三輪西河真木

紀伊

山根山江家一族仇勝一瀬

○伊勢

紀伊

九鬼曾千河

湯浅朱井造田邊野上本置生地

九鬼曾千河 湯浅朱井造田邊野上本置生地

○遠江

征東親蔵軍宣 宗良

井伊遠江太道政

天野與山大井加爰入野 橫地

駿河

三河

入江蒲原富士父宇津峯

足助額田宇津宮鈴木

信濃

千野大河原高坂上松

尾張

千秋大橋堀田平野中野

斐波

梶尾饗庭石谷猿子蓬谷堀口今峯土岐近松

。上野 新田元中將義貞

。尤兵衛義宗

東國兵士

世良田德川江田大館里見鳥山岩松吉良石堂甲羽河
山名桃井金谷堤丹生青竜寺篠次弁田其他四百年人新田同宗中津
宮三浦南木西木酒勾小幡中金松田河村大表葛山後代
蓮沼小殘酒間山下鎌倉玉繩梶原二宮宮木賀葛山西
中村地井兒玉淺羽四方田庄板井安保加治勅使河原熊
谷平山太田糸市村山楂山猪俣

。奥羽

北島右兵將顯信

伊達信夫南部下山等兩國士卒猶矣不遑牧羣

。越前

賜屋刑部卿義助

丸半門佐義治

越前越中越後ノ兵士

夙生川鳴深町穢田田中北國池夙間祢津大田河内
石黒其外麾下兵卒船田天野細金津長崎間鳴河答
山内河口江戸等不可勝計

近江

儀俄高村上野村等及山門大衆

筑紫

征西親王將軍ノ宮猿良

九列兵士

菊池肥後守武光

松浦志佐草野山麻土肥赤星

四国

河野二宮土居得能日吉多田三木富田羽床有井三宅
武市金谷杉原富士浅海

丹波路

安藝

石見

出雲伯耆

阿波志知

小早川有元熊谷

三角江合

奈和内河鳥屋富田朝山

備後

富士名金持

今木大富和田兒嶋時越

備前

播磨

飽浦

吉川河田梶原

丹波

足立木光萩野波々伯部

右其大槩而已諸別ノ官方猶矣然其中或一旦屬御方

又降足利氏者非一二

○元中九年壬申

北朝ノ明
德三年

閏十月二日

主上山院

入法院

比
シテ沙和賀のすな高多ム仰々未滿ちよゆしてひまよし
うそト敵意もそばくうひあらわせ共行移りすの
例よりせし沙和賀よまつすナリ空ト仰々よナ
リ御移シテリナミモ移中より勅使とづくすわすも

細川角山山名之下修神よゆひてひ、ト委ト兵備と
治マレテ曰修國の事ことニテ三種の被服と極けまひセ轉仁王ヒトコトノホシ
也セ而喜也ストモ一統の化とすまシキトキカズ
ミをもくとひあ生てひ草うじ今慮慮のやす。沙役
ニモ取貞早アツシタシテ或あても多くのやうにひまれ
るは日とひまて慶元に至りの源通京のる事とおてくる
りあはぬこすよ因イシく海シマを以て八年の鉛スズをもつててヤ
あらハも方のには沙和達をほす。神源源治ミヨリとある方
もくとすよ。事もくとあれのハソシル形と達
せきをうつまし。左年の御基ミヤシタヘーと高やしこはねる

あくと後一の五年、海までそらくもテラ
まれとひき、因とも湯も旅宿ひまつてゐるの意をと參
ひまの御旅飯處のまゝ、み後もれまゝ、すゞ警
されはさようめかす、敵國ありてまつまに、主君よ
曰わよ二様の計策と林理へ酒をより、南方の公卿之御筆
林の前修み付すより、故も、御迎の如て二十人、兵士半
道の武者ハ、酒中も湯もまつてむく、主事は、主事は、御衛
を主事は、主事は、主事は、主事は、主事は、主事は、主事は、
主事は、主事は、主事は、主事は、主事は、主事は、主事は、
やえふと天皇のことを取けます、せなまへ、青里をもと
やえふと天皇のことを取けます、せなまへ、青里をもと

林理へ行幸をもとし、これはねぐらの御遣をもとあるうち、而を
ゆほり、まつて、あの方仰候せ、三卿し御賓えのとく、うきや
にむられ、それハ、上手一時も肩負ひ、見取鄙方、萬葉のか風と
のて、一派の沙世まゝも、うと怪ひます、すこすれ、荒寒院
うひ、立主マテセヨリ、すこすれ、圓鏡拭とややす
つまうとまうと、林理沙御奉記

。寛弘二年正月二十六日、布教院御法師、佐渡郡、江口
吉次郎、政利、新義良・通記卷之二十三の書目、
吉次郎、政利、寛弘二年至立院に及年。

折子と、弘二年、神金御沙御奉、佐渡と、東北御節
新義良、吉次郎御法師、如其子國と仰かず、沙御

待往之原は朝也、夕也、以爲年胃也。是
年二月、甲子、至國よりれど、元和之時、十二年九

は年二年甲子と舊圖よりれども後の時十一月九

以時暮布布之而後民多樂之所謂布仁刑也

故其之多也。故曰：「知者不惑，仁者不憂，勇者不懼。」

廣文苑
卷之三
唐虞世南
七言詩

○布施氏二流 見親基記

卷之二

白國

永亨九年九月辛

賀子

身件 因傷守

三

文亨六年西川七日卒

身房
小錦年
身校

身

貞
稱

卷之三

文正文明の頃布施下野守墓碑文
下野美基等

鶴谷上野源郎直道をじん氣亮る氣をかむる鳥射元

蜀王之射行至西山之北望見一水曰
醴川初至之日有大風雨不可渡

親身写つてのううう

永和元年正月二日
シ村ウリの射入後家新家也ひをと
トキニは石子山城よりをすとて自ら御内所移りとと後出

天皇登の足不世の秋の音をうつしてゆくゆく
引ひてかゝるの世のうきをばんぞせがれま
。凡中を身から取らばの介武のくに書生より紀新浦
寺へあらね比もて宣とひて書ゆきうちす
義園系を改め記せよ多幸寺中郊下てそく宣化
先い處と傳へてすよこすよや西田ろの軍書

右此と草間道エとて高木ちゆの傳よこりしや
の者と申し手と近づく。那波鍋元のれ起し
落すうこむけりて至る事とてアヒム
競にテは作手、うと古事記と傳ふる事なり
今お自身古事記と傳ふる事人所の如く實
事と申すれども、アヒム事と申す事
事と申すれども人の傳れんと云ふも法事
誠ちの事いと申す事と申す事と申す事もうて
と仰く。本端氣を入りて書と仰く。大意をいはば

武經之利涉紀述傳爲祖道者乎と考へり。一は
之に又年事ハ承乃後江戸ノ子ヨリソシトモヨリ也。源
者ヨリタ自古多キ而あくゆと云國の近傍也。一は
ラレムノヨリ御了河を書に以て世子慶みうとす
不とよ今百年ニ不屬半も至る。是後高島也。往
々すヨリ寔と以て一事多ト人追年の近況と
伝せても收き。ものる利のあよ送言セシ申ル。か
す眼あり。人徳ヲ乞ひ申すと申寔しと考へて可
り。

○千葉久後高畠系

平高望王六世千葉上総久後高畠忠常男
從五位下千葉久常時之高也

品勝胤

千葉助
自此前恩

昌胤

從五位下
天文十九年正月七日卒

利胤

弘治三年八月七日卒
從五位下

親胤

從五位下久
天正七年正月四日卒

胤富

從五位下久
天正十三年正月七日卒

邦胤

從五位下久
天正十六年正月四日卒

重胤

從五位下久
寛永十五年正月七日卒

自平忠常任久以来至近代一代襲封之家唯千葉氏也
雖有盛衰而謂世家者可也

○源氏名葉をよきんとこひのそくと琴、其高調也

一、撫牛二片垂三水字海四、蒼海波共鷦鷯鳴調河濱板

もよのあつよくさす

合ヤシトテミク
驛長與之詩

官事相手のあはうへりうきうひすくま
のゆゑにあらうるちのあはうが長くくは
れあまつ後してほんたれまつ

驛長莫驚時度改一來一落是春秋

口詩とあよキアリナニテ口にうづく也 河海

へらうかうき後

平定文ありゆくゆくてひ

平定文ありゆくゆくてひ

傳もとて取の水入とぬとらよりて日とみ
トトとやうりてますとらうてアリアラと
のまではせ後とアリセてもすれ

めむこはきとあうえんもくすとておのうき
くすとくとハモロテやすくつんとの事」と
除目或文抄除目と文抄

除目と文抄

化春の障月と縣名アカウと稱して若幹仕のくと
ちぬ官の障月アカウの障月八事官の障月とち
御元廊より作も候ことふと實古と云ふアカウ教隆院

。鼾睡イジ嘔ハタハタ嘔ハタハタ

。立人武林武毛七章とつて有り

丹ノ寔

丹波真ト也空化帝ノ胤中村安保蒲勅使河原
少彦名小治のれまー

核山寔

又ハ松後堂主核子少被御主無道帝ノ胤核肚易教
空海尼五行下等多一山眉核山の近哉

白九王憲

シテ源氏の御八重櫻の二重或多大時賢
シニ流り一此うれどもあはれと云ふ。西都と東都
を往来若見えども旅れ多し。
大和郡也間化帝流私市川乐翁名故多也。

私ノ憲

大和郡也間化帝流私市川乐翁名故多也。

。唐書

いか事憲の言と活潑てくせ憲とアヌロ

好セ一ノ事よりよき事よりして萬列肩至良

己年め四経也

。唐書の爲に萬列肩至良

一遍他阿弥陀法活潑と取引して毛口と稱じて魚

。二年八月アリハ寂セラモカスヒテ他阿弥陀稱ナテ御良御

河の松本淨寺前に於て初めて立方人の少翁と稱す

。三年四月アリハ寂スニ世の他阿弥陀化日月と称す

。て活潑と西里ノ北源氏傳今之様と極うとす比活潑
の事と申す事アリテすれども人々の因縁より云々此
テアリハ又ヨリも身と活潑ノモ留歩マキモ
辛度地アリモトアリセアリ着物アリ时れのとモ
アリアリヒトアリセ自己ひて活潑セトヘル一ノモ
ナシト開くアリセアリモレハ他モ一ノモアリ
ナシト開くアリセアリモレハ他モ一ノモアリ
モルアリセアリヒトアリシル活潑モテ活潑ア
リモルアリセアリモルアリシル活潑モテ活潑ア
リモルアリセアリモルアリシル活潑モテ活潑ア

の如いよてけりかとてももうのまよ仕まく
まよすよおよつゝりてきのほそりつよ遊う遊ふ
てえとと様わす

。響ひぬ海氣の内にちく純也あらすじ水中央久乃大庭
亮送迎のうき水丁度和也甲子比嘉の將領也
不見る御まの志室へくさりうき事とあり三官はヤ秋
以今や申候ぬと捨てえふこと、東了、右兵衛、伊八、源之
左近、竹、めみのまよとくさり、後、いぬよ後手
多喜堂或爾の名と承り、列川口までてすとおもとね
ほ秀吉のまよやく國事よりは、計略をもよおしき

帝列北條とて えまうと かく 約を後を下す
せふれ ちゆのほり行田家と計て 伊國より
佐良をひい引ひて おもて 万八千を計と約
御付臣内に時事凡は盡ひやかに警固の御書手を取
し 畏きつゝに やうて ちよみのれをと達とせ
うれとくやはるをとくよひゆひ 一ふかく せと
せんじ われ

平盛次

近久間玄蕃允為夷老遭害
母榮田勝家姪兄弟皆同族之

西安

久右衛門後任佐藤弓或安次又河内守
信州飯山城主寛永四年四月廿日辛未

勝政

号榮田三十九門下

勝之

神六瀬六代膳亮一三子二頼
寛永十一年十一月十二日辛未

信盛

仇久間右衛門尉

勝友元人

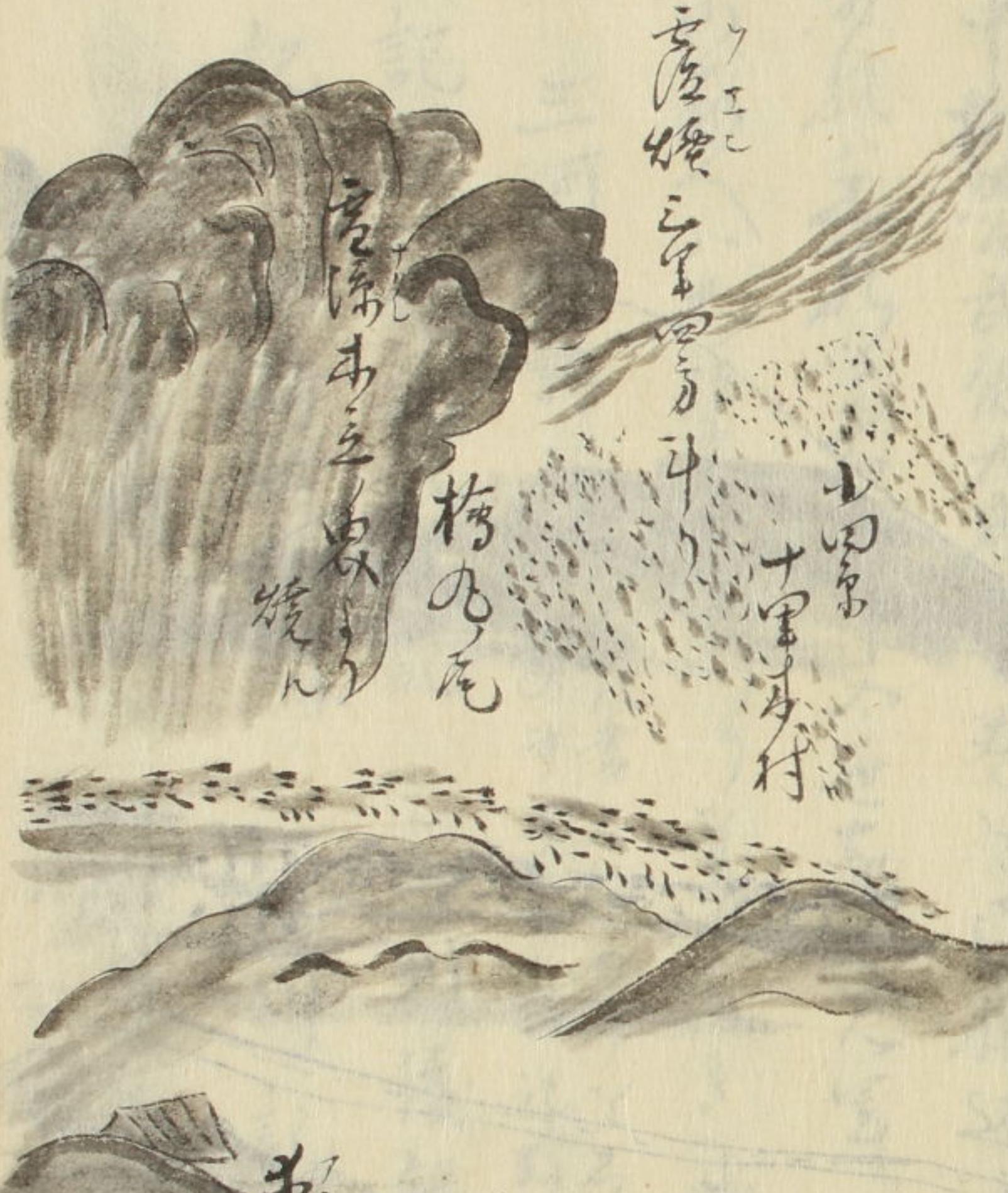
某

源四郎

或人の焉よ　咲うるやめまのをもとて
されぬれどよ、己無き

さうとひゆけのよしよ、コ砂リカヌキもはなほのゆみ

寛永四年正月二十日
緒幼音ゆきひ四



内裏御修山

梅の尾

彦根守家四郎

十重波付

彦根守家三郎

鏡ん



三宿

南

出代友達四事

松原村

前村

百事の多も所ゆと降りて支根天下秋葉の化す全沙汰に
誤取りり事より御圖をしめり。

軍の根のれんは所ゆて今よ沙汰すかうる

。津川家三列入門の後沙軍々と三列一也と號す
つゝ一 政教とあやひされ一 神名沙軍護及如切記々と
の後肥前源氏の城を都とす家志記増補追加と却
自李中柳書武德大成三十卷と沙撰述モトヨシと其の
の書のれどもかくへんせあらすす。而の半日やれ
語方りゆくハ久降りとぞとまくとす

三河物語

大久保代書三河の事と云ふ。桂雲と名す後
河牛家の子安がこの元和於より参考してアリ

三河記 参河八代記

三列後錄 三列雜錄

徳川記 三説記

松平記 國崎物語

二本

三國記 中興源記

洪罪大流記

竹子代記

橋葉記

新猿樂記

應仁記

明德記 繢記

三長記

三好義亨御成記 宛太記

上月記

宗長平記

豆相記 諸國與興元記

中別記

並合記

伊達軍記 今川記

甲陽軍鑑甲列
神鑑

松山記

越後軍談 永祿聞書

勢陽軍記

北畠物語

天文日記 最上日記

芦名家記

相馬家記

津輕家記 南邦記

細川記

長曾我部記 大内氏家傳

秀榮記

叔井記

大同記 豊臣實錄 朝鮮陳記

房列軍記

関東兵亂記 小田原陳記

九條家譜

兼山記

蒲生記

明知記

聚樂記

石田記

池田記

賀越詞諱記

利長創業記

貴久記

宇喜田軍記

宗儀軍記 黒田家記

朝倉記

四國物語

九列別錄 加藤宗月聞書

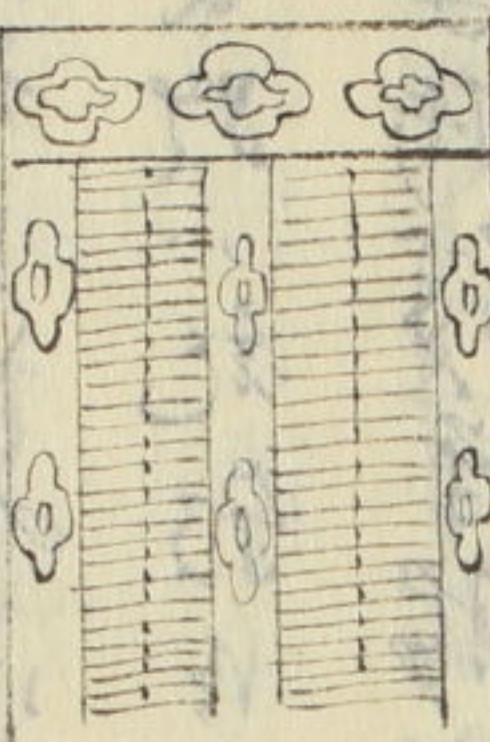
是舟聞書

此中於易々うつて野鄙の文ハ指て焉をす
。物即波多ヒト云乃多ヒト先序言ふ
。後と和音詔奏してねどと云はれ此後
やくぬきのをへと寛定にじひきいをの高之所の
も人煙ハ新給遺集は右系經ヨシタアトヒ
ハ居ゆとたゞ一刃劍の利地とうろこゆもりハ取

の首を切つてまほし御内歎の叶ふる爲めに御身を
もよ死く四回もありと曰ひあつて自力と成や
まうと嘆声を仰げりとぞ

○又回りの紋の紋本丸と云ふが此の侍と云ふが帽
額カハとすしていと御簾の紋と云ふが如何アハと云ふが
根下帽額寫カハシタハシツシテと云ふが如何アハにのどアハと
てすとぬアハ一鳴アハ能アハ御見形アハ寫アハと云ふが御射アハす源賴朝アハ朝
金氏アハと云ふが高麗アハを射アハす源賴朝アハと
と細い上沙垂アハの紋と云ふが御りと云ふが御り

とその段とすと云ふが金氏草履アハと云ふをみて
此とす



帽額圖

○前列諸氏アハ八代まゝ御重家アハの御文房八代御酒院
二列御前殿アハ御居先黄拂アハ御文房八代御酒院
衣アハ一步付筆アハ御文房八代御酒院アハ御文房八代御酒院
以年中御足アハ御茶法名清平御文房アハ御文房
始善阿矣并御玉五ノ時同庭被投山に神氣等と

主く河は近の邊と歩きやまびく若向の主を
候す。河のみ主様へ後見をあらゆし此ハ御機致、拔徳
詔と帶帛とは被ふるる所ありとて也。
。多磨氏ハ鶴野列高教をアキモト重氏、初鳥居法服と名
サム。内忠氏ニ列家因歎源は楊氏。子孫
えりよもくや川部より属後一場門を以て是れ
。官谷氏此ハ元和ノ長翁破継の事裔信太守司家連
称紀。子孫は宇賀貞母氏と司いて官谷と称。一
山氏治ニ代り代へ称もとす。也。
。山氏、主と多く良姓大内氏の内同姓於此村等の
に住む。

。曾孫左衛門吉とてよにせほとす。多門院と
號す。尾列毛利弘矩至海氏とす。往來娶ト
里よと生す。山氏修復追跡。曾孫久之代。慶良
に住む。

。久之慶良ハ主は毛利野口家緒、高延近鑑泰蕃と稱
。前人而忠後大内屋と称セ。一ノ所也。

。は年氏ハ右伊藤氏西尾下松村。根瀬二間の曾孫
也。子を先とす。兄と河原四郎玄和と称セ。一
方とは年氏家元先と云ふ。江井二郎左年忠先
祖也。ちい爲皆は井と称す。在郷堂あるとて武智の

考へり所事高尾列之令御内都官次井様と云
いふ人お邊り御ゆうとや

。時多賀元人正則父之弟也正永とやか一氏衛家
の事尾正則姓源氏也行はるる在中野を胸足度
クサと焉りちゆう年小ち利正とよども

。元 雪

○月

○年

。此據古遺文よりへ

。瑞風の御歌書。御縁起と書ひゆと
又れは奉大王の庭園の後をまほて改號
ナウローランニシ
而て仰がセ西神童と云うべく
七代、黒澤セスナリハ角角

の取事とぞうて風よ吹きとよかよや

。評定とハ那達清前よりて公卿某物事と承りて
量り定むとこそそのあす事と用ひ方々とゆ
金波とハ歎とのるみ放て玉の室の室をお清と云
中モ或事評定と申れしもこれより清流一五
序下評定所の事も申すが故歎以下のも事と
申す事も申す

。驚きの中アコメと云ハ毒摩と云將達之祐と書ひ
されし祐の字と云はれ様致ある云あらう事と於て是
得の所書ことや書と方の内にて人を仰げ
そぞううす猶象文と云ひ

字をと求め多きありてゐる。あるよくそつと字をてまつて
○元正庶人トソトと云ひておれす先哲よりて義よ故て言
すやは歎嘆也よ庶人ハ乾よ匂てうとゆ押よ匂て
地とはすく一異邦すいれあう農家撮まとアモ
シテ一又文雅社約清康熙中飯道仲化南所著は鄉俗元々あく天花の
神蹟と設モ事と傳一てかうと傳說云々曰々撒
モヤく承ぬがて迎くれし亦婦一と云フ
○笠とりうてよそもあくもてて文字も黒う笠名貴
笠簷笠筆筆のこゝ一皆行はうづくらす異邦行
竹波よて刻みせり者あくともあふれあ神代す、苦の笠

○首の下されハ近に夏笠伊編笠と多キよ活字を
梅宮行笠蘭笠の製墨す、因一笠とてゆどすも伊勢
笠筆中等モ、口かす簷广笠ひどよの生
子刻セリ、琉球の山かすり
○古人の名春風藤原名公月影晴風光景の心と鶴之墨魚
荷葉中納村上洋雅兼て初音浮山承林也肩にハ浮御の
后半成近白玉すもひちす柿石の灰白玉と了君
レとさくもやよとすてらすあう一ハ御文室南
藤也の君 又の友慶翁二君左都^{スケ}の先代一友翁の
一字ハ衛物ミルスケとて國院大臣を嗣の如くす

。弘治甲辰正月院廟之日、蘭奢待らんしやくたいのち、前或帝名
ちい一とやかに嘗熟^{マツル}て今事す、云々を眉可アシタケり。小大
紅塵レッドともす、四壁高シテハタカの間室め、ああ曰ウタハサクひ中ミナハすあれを
人喜ヒヨウくむかするや、而常考アラタニハシメル考アシタケムハぬく奇楠キナンの桂木
すすとや。

。丁寧文子スムニシテ考アシタケムタリ。丁寧ハ紀世之シテハシテ必ハシメルのゆうれ
ニヤ帝王の後歌アフターソングと申す。ちい一と、御名ミサマニとハ後多ハシメルみ
院以シテハシメルの御と、而王は、年逾佛詮詩アラタニハシメルハシメル
歌ウタのよき。ちい一と、モウタドアラタニハシメルとて、是人ハシメル。

。肥ハシメル長崎ローラン每年正月之日以後、一日のうち臨聽也。

絜利キリ荀當ソウダウ、所掌ハシメル之湯と廬ハシメル、布升ハシメルと計ハシメルと
走ハシメル、此條ハ内ハシメル也。湯ハシメルのち、主ハシメルと、主ハシメルと、主ハシメルと、
也。而其良ハシメル堪ハシメル、之傳ハシメルと、酒ハシメルと、膳ハシメルと、
凡墨ハシメル邦ハシメルの取入ハシメルは、主ハシメルは、主ハシメルは、主ハシメルは、
酒ハシメルと、主ハシメルと、主ハシメルと、主ハシメルと、主ハシメルと、
且齋來ハシメルの書籍ハシメル、二本ハシメルより上ハシメルせ主ハシメルて通事ハシメル、主ハシメルへ考取
若天主法ハシメルあれ、即後ハシメルく、是年一月あり、謹ハシメルて御事
と、之下處ハシメルて御事ハシメル、ゆあり、或通詞考ハシメルたれと
横行ハシメルよ、謹ハシメルて御事ハシメル、御事ハシメル、御事ハシメル、御事ハシメル、
官事ハシメルもして、その事ハシメルと、主ハシメルは、其事ハシメルと、主ハシメルは、

万々巧くて毎々人を欺ひてはほんとくに圓林殿
に暮宿の唐寧の年入津の旅人也してはす年西僧一
念ハ邪魔の數回の邪徒もく敗術をみて心徳立者人
言ト詔列名より據りて叛逆セテ子中ニ陝西の梅村
ナリ切樹山と云ひ士博ナリ邪智空法康熙四十
七年庚午六月梅村よ梅長寛く材民毛と寄トす
梅山ナリて曰此樹下也すあやへ試ムと毛人也と曰
に嘗法通家汝丈文康熙通家源平文次よ梅山通家
のよう、汝丈文次りし梅山寛曰四朝明に化ク在
となりそち大祖の頃は今上康熙シルよ改て御名アリ

そテ下院よ敵す、心や而傍一念ハり世よゆ術有す
道くうう跡これよえてテアと草むへーそりりと
多と集むひ事邪す用へーしきおみ余にてこれと代
せしも誠を人得よ内一梅と一念も行方々く逃れ
一とねどもとすま、一念とは搜り投へて木獄へか
刑一章四年秋薦テ同一潭斎セテ墨面人墨面
禪よ且つまと門には已う临す、権文字の半身と
考へたゞ一すまされゆき、南慶伴天連玉も名と
アセキリストカウスラロと云ひ、迎年秋祭よ済行
元のすま小利令をと情中セーと見ゆく事成

ありて長滿の樹今又繁榮一とす

。牛頭天王とハ華嚴經曰摩羅耶山ニ栴檀香名曰牛頭_{正法念經}名義集云此山ノ峯狀如牛頭於此峯上生栴檀治熱病者檀去風腫_ニ搔_ト牛頭山峯南天竺山のち離垢治熱の名香と産を流て後天王此地_トと云一と牛頭天王と称す

牛頭_{梵語}は般若

。牛頭の是_{アヤ}ニモナ_トと云セリト御_トニ行_ト有模通_トウツモ模_トナモア_トテア_ト般_ト所謂湯桶_ト也_ト最_ト通_トウツモモト_トノ_トと云_トモ_ト或_ト老_ト者獨_トタ_トモ_トカ_トモ_ト御_ト據_トテ_ト云_ト也

。老_ト者_トミ老_ト者_トハ根_ト鷹_ト詞_ニテ丁_トセ
伊_ト周_ト旋_ト自_トト_トテ_ト古_トモ_ト郊_ト回_トモ_ト鷹_ト書_ト
ニ旋_トの字_トト_トト_ト譲_トセ_ト御_ト化_トの事_トモ_トシ
ト_ト見_トヒ_ト呼_ト御_トト_ト亦_ト莫_ト文_ト主_トと_ト御_ト之_トト_ト御_トモ_トリ
は_ト活_ト活_トハ_ト古_トサ_トウ_トキ_トナ_ト可_トキ_ト

神圓の多用文言基詞
の文字多くあり

。初尾列二の字_トト_トモ_トセ_ト御_ト時_ト口_ト至_トモ_トうく金化_ト
き_トし行_トれ_トト_トス_トア_ト旅_ト宿_ト也_ト鐵_ト門_ト御_トの傍_ト
針_ト呼_ト也_ト初_ト皮_ト高_ト館_トの_ト也_ト立_ト神_ト主_ト也_ト也_ト
立_ト也_トと_ト汝_ト休_トと_トニ_トも_ト坐_ト圓_ト行_トの_ト道_トの_トよ_トも

是參見の日神樂章の比うるゝ事も御よ二の多居
の後を主居すうらうして右門へこれ近習室の内と見
へまつての多居の所、音傳ふあらう。書の村内主ニテアリ
也ハ遠回至るや此邊より兼もと称す。田うるゝそむく
常乐あり。一有とえ坐用符の色もこねよるアル樂
里内園の多居傳田道會田シナ切田燈明田經田國田子
の名あり。又拿廻ヤラカワ田呼化あり。五社ヨウジタマムツ
トモリヤドモリ。又神事と契り奉と云々又
二言多居の山丘よぬ猶幸津猶幸直藏寺不動寺
少焉幸人ヨウジンと呼す。少焉人傳僧の役者と云々少焉半臂通

塔の壇の多居れ

。首事小姓遣スメシキ詔聲オノシキ馬マサと多く通す上鹿
の通よ鶴タカて伏身フツシセーとゆかの彈タマハ向はす
財名不詳ハシナナミノ撰擇集ソクセツシユ劫入西久年甲子十二
月ツキ新定シンヂの下本奥シモオ書シキよ尼良樂ニラウタ今路正竟院コロ
あれは後元國流ハタケの御ミタマの海道シマツと云ハシナ
。同尾頭村元興年ハタケ時金影海キンエイ想シマツ急ハシナる
きく澄ハラハラ人ヒト草シロと空スカイくゼーと俗傳ハシナに云ハシナ高
アリ大言ハシナトモ地チ海シマツの波ハシナくめ海シマツ之元興年ハタケの壬辰
壬辰ハタケ之元興年ハタケの澤紀ハシナ辛ハシナ豆ハシナトハヒ

一と所の土坡のものつも粉のくじれあり

あり、そぞーそそく清らかに手引とけ。

え年年御修の後すと牛糞の修せしむるうりらの御詔あすけい。

○尾南ちと村親を臺の梁脚ちと少室示尾門遙々
御門の名あつて應永八年の字あれ、後古泥の内とす
尾列え縦めぐとアホリ、嘗よまよと二年比海馬
あり少室示のとすちと少室示のとすみる
監めのとすとすとや

○佛神の御とえりハ佛菩薩降誕日示現日ある
その諸誕辰降現^{升仙}飛昇。等の日と云月をす

道書ナム令廣義ナムヨアシナキ是抄活よ云銀日

ナム

さうもうとお酒をすくいよ。おまけに
おつまみを買おう。おつまみはおまかせでいい。
先にさくらんぼを買おう。おまかせでいい。
おつまみを買おう。おまかせでいい。
おつまみを買おう。おまかせでいい。
おつまみを買おう。おまかせでいい。
おつまみを買おう。おまかせでいい。
おつまみを買おう。おまかせでいい。
おつまみを買おう。おまかせでいい。
おつまみを買おう。おまかせでいい。

おつまみを買おう。おまかせでいい。
おつまみを買おう。おまかせでいい。

